

ミネルヴァ日本評伝選

われ日本の柱とならむ

日蓮

佐藤弘夫著



ミネルヴァ書房

刊行の趣意

「学問は歴史に極まり候ことに候」とは、先哲荻生徂徠のことばである。

歴史のなかにこそ人間の智慧は宿されている。人間の愚かさもそこにはあらわだ。この歴史を探り、歴史に学んでこそ、人間はようやくみずからの正体を知り、いくらかは賢くなることができる。新しい勇氣を得て未来に向かうことができる。徂徠はそう言いたかったのだらう。

「ミネルヴァ日本評伝選」は、私たちの直接の先人について、この人間知を学びなおそうという試みである。日本列島の過去に生きた人々の言行を、深く、くわしく探つて、そこに現代への批判を聴きとろうとする試みである。日本人ばかりではない。列島の歴史にかかわった多くの異国の人々の声にも耳を傾けよう。

先人たちの書き残した文章をそのひだにまで立ち入って読み、彼らの旅した跡をたどりなおし、彼らのなした事業を広い文脈のなかで注意深く観察しなおす——そのとき、はじめて先人たちはいまの私たちのかたわらによみがえってくる。彼らのなまの声で歴史の智慧を、また人間であることのよろこびと苦しみを、私たちに伝えてくれもするだらう。

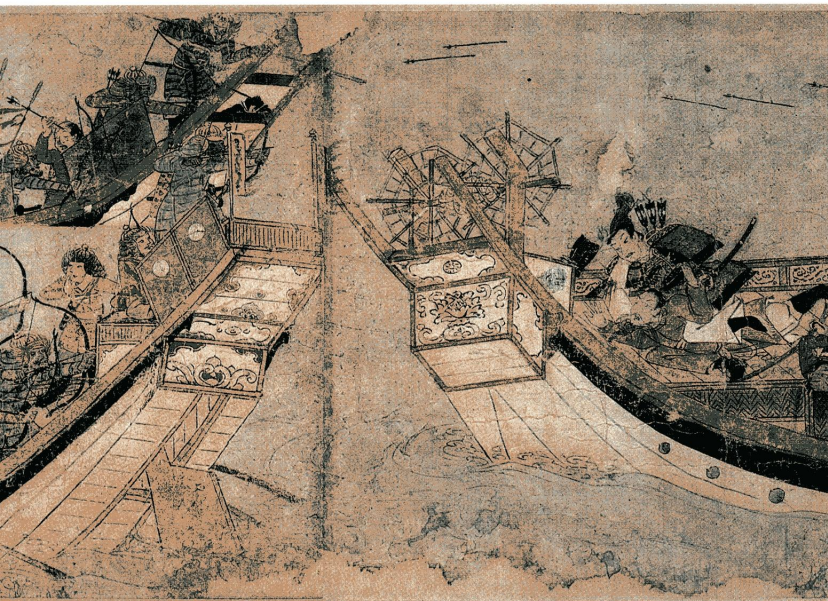
この「評伝選」のつらなりのなかから、列島の歴史はおのずからその複雑さと奥ゆきの深さをもつて浮かび上がってくるはずだ。これを読むとき、私たちのなかに新たな自信と勇氣が湧いてきて、その矜持と勇氣をもつて「グローバルゼーション」の世紀に立ち向かつてゆくことができる——そのような「ミネルヴァ日本評伝選」にしたいと、私たちは願っている。

平成十五年（二〇〇三）九月

上横手雅敬
芳賀 徹



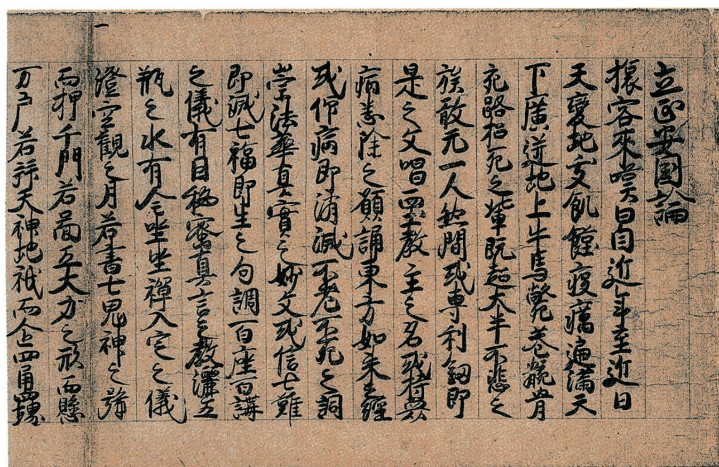
「日蓮聖人像」(妙法華寺藏)



(上) 狩野探幽筆「日蓮聖人龍口法難図」
(本法寺蔵)

(下) 「蒙古襲来絵詞」部分
(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)





日蓮筆「立正安國論」部分（法華經寺藏）



池上本門寺・宝塔 日蓮聖人御荼毘所

はしがき

池上の葬列

弘安五年（二二八二）九月初旬、八年余りの歳月を過ごした身延の草庵を後にした日蓮の一行は、紅葉の甲州路を経由する十日余りの旅を経て、武蔵国（東京都）池上郷千束にある信徒の池上宗仲の館に到着した。

翌日、日蓮は弟子の日興に命じて、身延の領主波木井実長への手紙を口述させた。

——ご子息たちに守られ、無事ここまで到達できました。また身延に帰るつもりではありませんが、万一ということもありますので、どこで死んでも墓は身延の沢に設けていただきたい。

旅立ちにあたってお預かりした栗鹿毛の馬は、とても気に入りました。このまま常陸の湯に引いていつては、人にとられることも考えられますので、湯から帰る間上総の茂原殿に預けることにしました。知らない舍人では心配です。殿に付けていただいた舍人にそのまま世話させるようにいたしました。よう……。

氣候の厳しい身延の山中で長期間消化器系の病を患っていた日蓮の身体は、極度に衰弱していた。もはや日蓮には、手紙の末尾に花押を書く力さえ残っていなかった。

もう一度身延へ戻るつもりだという言葉とは裏腹に、日蓮は死を覚悟していた。自分の墓は身延に立ててほしい。あなたからいただいた馬をどれほど気に入り、大切にしているか。——死を目前にした日蓮は、長い間身延の日蓮教団を支え続けた実長に、精一杯の感謝と気配りを示すのである。

一〇月八日、日蓮は自分の死後教団を率いるべき指導者として、六人の本弟子を指名した。日蓮の死期が近いことを知った門人たちは、各地から続々と池上に駆けつけてきた。一三日午前八時、集まった弟子や信徒に見守られ、日蓮は六一年の生涯を終えた。枕頭にはかつて日蓮がみずから図顕した大曼荼羅が掛けられていた。その波乱に満ちた生涯とは対照的な、静かで穏やかな臨終だった。

日蓮の葬送は翌日執り行われた。深夜、たくさんの弟子に守られて池上邸を出た日蓮の遺骸は、屋敷にほど近い丘の中腹に設けられた荼毘所に運ばれた。真夜中、積み上げられた薪に火が放たれた。見守る人々の唱題の声が響くなか、初冬の乾いた空気に火はたちまち勢いを増し、天に届くばかりに燃え上がった。

取り巻いた弟子たちは、師日蓮と結んだそれぞれの絆を振り返り、思い出をかみしめながら、闇に舞う火の粉を見つめていた。

分裂する日蓮像

今日の日本で、およそ日蓮ほど名の知られた僧はいないのではないだろうか。幾たびもの死線をくぐり抜けたその波乱万丈の人生は、さまざまな伝説や奇譚に満ちあふれており、小説や戯曲や映画の恰好の題材とされてきた。これまでどれほどの数の日蓮の伝記が世に問われてきたか、ほとんど見当もつかないほどである。

反面、日蓮ほどその人物のイメージが分裂している人物も珍しい。

日蓮といえはまず思い浮かぶのが、諸宗に対する激しい批判である。「念仏無間、禪天魔、真言亡国、律国賊」のいわゆる「四箇格言」は、日蓮の排他的で攻撃的な性格を端的に示すものと捉えられてきた。その他宗排撃は同時代の仏教界からの激しい反発と権力による弾圧を招いた。その後半生は、まさしく生死にかかわる危機の連続だった。日蓮は鉄の意志をもつてそれらの試練を乗り越え、新たな信仰の境地を切り開いていった。どこまでも妥協と安住を拒む、戦う人間の姿がそこにはあった。その一方で、日蓮は常に周囲に対するこまやかな配慮を忘れない、気配りの人であった。ことあるごとに信徒一人ひとりに対して丁寧な手紙を書き、それぞれの置かれた状況を斟酌した、心に染み入るような言葉を贈っている。死を目前に控えた波木井実長宛の書簡にも、そうした気配りの一端を窺うことができる。不撓不屈の闘士日蓮のイメージとは異なる、驚くほどに柔和な眼差しがそこにはある。

日蓮自身の内面の重層性に加えて、日蓮の没後に作り上げられていったイメージの多様さも、その人物像の分裂に一役買っている。

日蓮はまず日蓮系の諸教団においては、祖師・創設者であった。そこでは、日蓮は宗祖であると同時に信仰の対象でもあった。今日、大半の寺院が日蓮像・祖師像を主たる礼拝の対象としている。日蓮はもはや一教団の開創者という立場を超えて、通常の人間とは異なる聖なる存在にまで祭り上げられているのである。

日蓮に就いて
宗師

日蓮はまた、近代に興隆する「日蓮主義」の拠り所であった。田中智学氏らによって、日蓮は「憂国の予言者」であり、調伏ちゆうふくを行つて蒙古を退散させた「国聖」であることが強調された。さらに、第二次大戦後には法華系の新宗教の隆盛に伴い、「新興宗教の教祖日蓮」の鮮烈なイメージが人々の脳裏に焼き付けられていくのである。

日蓮研究の課題

こうした特定の宗派的・政治的立場からの日蓮像に対し、日蓮の生涯と思想を事実じじつに即して明らかにしていこうとする試みも決してなかったわけではない。

江戸時代から現代に至るまで、日蓮研究の中心となってきたのは日蓮宗各派の「宗学」しやうがくだった。筆跡鑑定や遺文の年代比定といった分野において、宗学は著しい学問的貢献を果たした。だが宗学が基本的には宗派を単位とし、日蓮が聖なる祖師であることを前提とする学問であつた。そのため各宗で信奉される祖師としての日蓮像を超えて、彼を歴史上の一人物に還元し、その伝記と思想を批判的・実証的に検証するという方法をとることは困難だった。それゆえ信頼に値する日蓮研究は、宗学とは一定の距離を置いた、客観的立場からの実証的研究にゆだねられることになつたのである。

そうした立場からの日蓮研究の試みとしてまずあげるべきものは、姉崎正治氏あねさきまさはるの『法華経の行者日蓮』（一九一六年）であろう。著名な宗教学者である姉崎氏の手になるこの書は、日蓮の生涯をはじめて学問的に跡付けたものとして、日蓮研究の古典とよぶにふさわしいものである。また、戦前の研究としては山川智応氏ちおうのそれも重要である（『日蓮聖人研究』一・二、一九二九・三二年）。

日蓮についての批判的研究は、戦後になると目覚ましい発展をみせた。戸頃重基とこうしげもと、高木豊、川添昭

二、藤井学、田村芳朗^{よしろう}、中尾堯^{たかし}、佐々木馨^{かおる}、末木文美士^{ふみひこ}といった各氏による、それぞれ特色ある日蓮研究・日蓮論が相次いで発表された。なかでも高木豊氏の「日蓮——その行動と思想」（一九七〇年）は、その堅実な手法と、史学・教学両面に目配りしたバランスのとれた記述から、現在の日蓮研究界において「定本」ともいふべき位置を占めている。

本書の立場

私は本書において、これらの代表的な先行研究を踏まえ、それ以降発表された新たな研究成果を吸収して、できる限り事実即して日蓮の足跡を再現しようと試みた。さらにその行状と関連づけながら、日蓮の思想の形成過程を解明し、その特色と意義を、広く同時代の歴史的な文脈の中で明らかにしていくことを目指した。その上で、本書は最終的には、個々の断片的な言動の集積を超えた日蓮の全体像を描き出し、それによって人間としての日蓮の魅力を再発見することを目標としている。

懐^{ふところ}の深い偉大な思想家の例に漏れず、日蓮もまたその発言のうちにさまざまな解釈の余地を残している。一見明らかに矛盾すると思われる言葉も、その著作中に少なからず散見する。これらはいかに実証的研究を進めようとも、そのレベルでは解決困難な問題を孕^{はら}んでいる。

それに加えて、日蓮という人物がロゴス（論理）よりはパトス（情念）の人間であつたということも考慮しなければならない。それは決して日蓮が論理や思考の筋道をないがしろにしていたという意味ではない。日蓮はそれらのもつ重みをだれよりもよく承知していた。しかし、同時にその限界も知り抜いていた。

日蓮の生きた時代の伝統仏教界では、論理性と体系性にかけてはこれ以上望めないほど完璧な教学が整備されていた。だが、それは当時の生活者たちにいったい何をもたらしたであろうか。——日蓮は、論理が論理として独り歩きするような仏教界のあり方に疑問を抱いた。そして、仏教者の原点に立ち返って、思想や教理が人間にとつてどのような意味をもつかを根源から問い直した。それは日蓮が、仏教を学問分野からいま一度信仰の世界に引き戻したことを意味する。

そうした基本的なスタンスに立つゆえに、日蓮はみずからの思想の体系化を至上視することも目的化することもなかった。一部の主要な著作を別にすれば、その発言はおおむね状況主義的である。

それゆえ、個々の状況から切り離された行実の加算として日蓮の生涯と思想を描こうとしても、結局は血の通わない人物像にしかならないであろう。本来整合的であることを前提としない日蓮の発言を突き合わせて、無理にそれらの矛盾を糊塗しようとすれば、かえってその宗教のもつ熱い生命力を見失わせる結果になりかねない。日蓮の一つ一つの言動は、それが発せられた状況と場を離れては、生命の通わないただの鉄片にすぎない。日蓮の宗教者としての魅力は、それらの鉄片を引き寄せ命を吹き込んでいく、強烈な信念の磁力にこそ存在するのである。

本書は厳密な学問的な手続きを踏まえながらも、究極的には日蓮のそうした信の世界の核心にまで降り立つことを目指している。その時はじめて、日蓮は生き生きとした息遣いをもつて、時代を超えて私たちの前に蘇^{よみがえ}ってくるにちがいない。それこそが私の追い求めてやまない、学者としての日蓮ではなく信仰者としての、そして人間としての日蓮の姿なのである。

日蓮——われ日本の柱とならむ 目次

第一章 立教開宗への道

1 誕生

日蓮の生地 小湊か片海か 出自 文筆の家

文筆官僚のネットワーク 幼年期の環境

I

2 清澄入寺

清澄寺に入る 清澄の学問 入寺の理由 虚空蔵菩薩への立願

9

出家

3 鎌倉留学

鎌倉へ出る 「戒体即身成仏義」を著す 天台浄土教と専修念仏

仏が選り取った念仏 専修念仏への弾圧 弾圧の政治的背景

〈選択〉から〈融和〉へ 二つの念仏の論理

「戒体即身成仏義」の念仏批判

18

4 比叡山への旅……………

31

京都へのあこがれ 中世寺院の正統性 比叡山にて 日蓮の修学
念仏排撃理論の習得 法律家日蓮の誕生 叡山以外の留学先

5 立教開宗……………

42

立宗宣言 立教開宗のイメージ 融和主義と排他主義

旧仏教の念仏批判の影響 天台大師智顗の生涯 五時八教

初期日蓮の信仰世界 二つの念仏排撃の論理 権実判展開の背景

日蓮の衝撃 〈選択〉の発見 孤立する日蓮

6 清澄離脱……………

61

清澄寺内の波紋 真言行者日蓮 下総守護所での活動

東条景信との対決 清澄を出る

第二章 立正安国の思想……………

69

1 鎌倉へ上る……………

69

鎌倉進出の時期 草庵の所在地 なぜ鎌倉を選んだか 日蓮の幕府観

念仏の流行

2	『守護国家論』の念仏批判.....	77
---	-------------------	----

念仏批判の集大成としての『守護国家論』 念仏排撃の論理

『守護国家論』の特色 体制仏教としての専修念仏

法華至上と融和主義 門徒集団の形成

3	『立正安国論』提出.....	85
---	----------------	----

正嘉の飢饉 日蓮のみた惨状 飢饉の原因の探求 幕府要人との関係

実践の中から生まれた『立正安国論』 なぜ時頼に提出したか

国王と国主 中世国家論と日蓮

4	安国論研究の現在.....	98
---	---------------	----

立正安国論の成立 善神捨国の根拠 神天上の系譜

愛国者としての日蓮像 仏法為本と王法為本

5	通説を見直す.....	104
---	-------------	-----

「客」の立場についての誤解 「立正」の意味するもの

法華至上と法華独勝 「安国」とは何か 仏法による国家の繁栄

「先析国家 須立仏法」の解釈

6	実践の書としての『立正安国論』.....	114
---	----------------------	-----

天台沙門としての日蓮 国家観念の旋回 国土改造の論理

権力批判の視座 手段としての政治権力 為政者の責任

現実変革の主体 日蓮の覚悟 立正安国論の視座

第三章 蒙古襲来と日蓮

1 安国論提出の余波

時頼の対応 時頼の信仰 念仏者との論争 松葉ヶ谷の法難
伊豆流罪 故郷に帰る 小松原の法難 師との再会

2 法華經の行者の自覚

法華經の再発見 現実觀の転換 五義判の形成
法華至上から法華独勝へ 法華經の行者 小松原法難後の行動
再び渦中へ

3 蒙古国書の到来

元からの国書 国書への対応 日蓮の蒙古觀 諸宗批判の激化
天台宗の位置づけ 日蓮の使命感 増加する門人

4 日蓮は予言者か

飛び交う未来記 予言者の条件 権化の使命 予知能力の根源
日蓮の予言の特色

161

152

139

127

127

5	諸宗批判の激化	169
---	---------	-----

漂う暗雲	訴えられた日蓮	忍性の祈雨	日蓮の忍性批判
行敏の訴状	日蓮の返答	行敏の日蓮批判	仏像を破壊する門徒たち
破仏の意味	凶徒を集める		

6	法難前夜	184
---	------	-----

忍性側の戦略	法難の裏舞台	日蓮の逮捕
--------	--------	-------

第四章	佐渡の開眼	191
-----	-------	-----

1	文永八年の法難	191
---	---------	-----

八幡神を叱る	竜の口へ	首の座の体験	依智での滞在
斬首を免れた理由			

2	教団壊滅	202
---	------	-----

鎌倉の迫害	信仰を貫く者たち	転重軽受	不軽菩薩
佐渡への旅立ち	依智から寺泊まで		

3	佐渡に渡る	211
---	-------	-----

寺泊の日蓮	三昧堂の冬	念仏者との法論	寺泊御書にみる日蓮批判
唱題の理論化			

4	我日本の柱とならむ	219
---	-----------	-----

開目抄の執筆	究極の教えとしての法華経	十界互具の論理
一念三千の法門	日蓮のみた一念三千	永遠の仏との邂逅
仏意の実践者としての日蓮	久遠実成と一念三千	日蓮の開目
三大請願		

5	佐渡の信者たち	232
---	---------	-----

門徒集団の形成	国府官人のネットワーク	一谷の日蓮
佐渡の信徒の拡大		

6	本仏との邂逅	238
---	--------	-----

『観心本尊抄』を著す	法華経と題目との関係	地涌所伝の題目
事の一念三千	日蓮は地涌の菩薩か	施陀羅が子の自覚
十界曼荼羅の図顕	文字曼荼羅の系譜	草木成仏説と曼荼羅
信仰体系の完成	流罪赦免	

第五章	身延の日々	255
-----	-------	-----

1	身延入山	255
---	------	-----

平頼綱との会談	日蓮の懐柔策	鎌倉を離れる	身延行きの真意
波木井実長との関係	草庵の風景		

蒙古来たる

日蓮の捉えた蒙古

諸悪の根源としての真言

隣国の聖人

『撰時抄』の述作

道善房の死

3 身延の生活

草庵の生活

千日尼への手紙

手紙による指導

本尊の授与

女性信徒

4 信仰と世俗社会との葛藤

池上兄弟の勘当

窮地に陥った四条頼基

主君との和解

迫害される門弟たち

5 信仰世界の成熟

三界の主宰者としての釈尊

世俗権力の相対化

中世のコスモロジーと日蓮

垂迹の使命

神々の役割

神々の限界

6 熱原の法難

富士郡の弘教

迫害の魔の手

弾圧の必然性

法難の経過

殉教する農民信徒

法難の意義

7 霊山浄土への憧憬

死者の世界としての霊山浄土

霊山浄土の阿仏房

立正安国と霊山浄土

参考文献	325	靈山往詣の条件	三大秘法抄の真偽論争	事の戒壇と理の戒壇
あとがき	333	蒙古軍の壊滅	新坊の完成	池上へ
日蓮略年譜	339			
人名・著作・事項索引				

図版写真一覧

「日蓮聖人像」(妙法華寺蔵)		口絵1頁
狩野探幽筆「日蓮聖人龍口法難図」(本法寺蔵)		口絵2・3頁上
「蒙古襲来絵詞」部分(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)		口絵2・3頁下
日蓮筆「立正安国論」部分(法華経寺蔵、東京国立博物館提供)		口絵4頁上
池上本門寺・宝塔 日蓮上人御茶毘所(池上本門寺提供)		口絵4頁下
誕生寺(千葉県安房郡天津小湊町)(誕生寺提供)		2
清澄寺(千葉県安房郡天津小湊町)		9
「円光大師(法然上人)坐像」(当麻寺奥院蔵、奈良国立博物館提供)		22
「選択本願念仏集」(廬山寺蔵)		23
比叡山横川定光院(滋賀県大津市)		34
「不動・愛染感見記」(保田妙本寺蔵)		52
安国論寺裏山からの遠望(鎌倉市)		71上
妙法寺(鎌倉市)		71下
飢饉の光景「人道不浄相図」(聖衆来迎寺蔵)より		86
「北条時頼像」(建長寺蔵)		90
親鸞像(専阿弥陀仏筆「鏡御影」部分、西本願寺蔵)		118

松葉ヶ谷の法難「日蓮上人註画讃」(本圀寺藏)より	132
鏡忍寺(千葉県鴨川市)	139
「須弥山図」(龍谷大学図書館藏)	143
「聖徳太子未來記」(叡福寺藏)	162
日蓮筆「行敏御返事」(本興寺藏)	176
平頼綱に逮捕される日蓮「日蓮上人註画讃」(本圀寺藏)より	189
下馬四角(鎌倉市)	192
龍口寺(神奈川県藤沢市)(龍口寺提供)	196
土牢に押し込められた日朗ら「日蓮上人註画讃」(本圀寺藏)より	208
日蓮筆「勸心本尊抄」(法華経寺藏)	239
「佐渡始願本尊」(身延山久遠寺藏)	247
身延山久遠寺(山梨県南巨摩郡身延町)(身延山久遠寺提供)	264上
西谷の草庵跡(身延山久遠寺境内)(身延山久遠寺提供)	264下
日蓮筆「兄弟抄」(池上本門寺藏)	284
大坊本行寺(東京都大田区)(大坊本行寺提供)	322

鎌倉



